
運命に、明日を望んでも

闇の鼓動

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命に、明日を望んでも

【Nコード】

N51980

【作者名】

闇の鼓動

【あらすじ】

主人公はどこにでもいるはずの隠れオタクな一般人のサラリーマン。ある日あるとき気づいたら自分は10歳の子供になっていた！しかも我が家は魔術師の家系らしい…。憧れの型月の世界に来て嬉しいやら驚いたやらだけど家の魔術はDies iraeのエイヴィヒカイト？？人を殺さねば使えないとか…。悩む主人公に両親は「まず聖遺物盗つて来い。」と言い放つ。

当面はオリ展開、それから予定はFate/zero↓Fate/stay nightになればいいなあ。

始まりの前奏へプロローグのプロローグ

此処は、白き場所、中身の無い白紙のような場所。何色も存在せず、何色にもなれる場所。

此処で繰り広げられたタタカイ（オペラ）も終わりを迎えていた。

「なあ、他者を信じるとは、それほど大事なことなのかね。」

「それを持たぬことが私の敗因であり、それに支えられたのが卿の勝因であるのなら、是非証明してもらいたい。」

今ここに、最後の恐怖劇が終幕を告げる。グランギニョル

「我らの敗北が真に絶対のものであったと、卿らは示して見せなければならぬ。」

「それが成されなければ、私はまた戻ってくる。負けていないことになるのだからな。」

消滅していく刹那、黄金の獣は勝利者へと証明呪いを残した。

勝利者は頷くことで応じる。

「では、その誓いにこそ……」

「ジークハイル
勝利万歳。」

黄金の獣は散っていった。これは既に語られた物語の一つの終わりである。その物語はそれ以上を語らない。

語る必要など無い。これはこの世界の物語であるからだ。この物語は既に勝利者達の顛末を示すことを使命とするのだ。

……だが、故にそれは見落とされている。この場にて消え去ったもう一つのものの顛末を……

消え去ったものは黄金の獣のみであるということに……

そこはある時、ある場所。知る人も無い平原に、一振りの槍が突き

刺さっていた。

黄金に輝くその槍の銘は、Longinuslanze Test
ament《聖約・運命の神槍》といった。

も】

【運命に、明日を望んで

ローグ

始まりプロローグの前奏プロ

彼は、世界を変えようという気はなかった。ただ人が人として安ら
げるようにと願い

貧しい者・虐げられた者に向けて説教をおこない、人間の平等や、
互いのあいだの愛を語っていた。

そして彼らの間の宗教を否定した発言をしたことも、彼にとっては
当然のことであったのだ。

しかし、いつの頃からか、彼は救世主と呼ばれることとなった。彼は「神の子」として誕生したという。

様々な教えを説き、奇蹟を起こしたいわれた。そして、弟子の集団が構成された。

さまざまな病人の治療を行い、癩病らいびょう患者を癒し、死者をよみがえらせたなど、

多数の奇蹟がまことしやかにささやかれていた。

彼は困惑した。自分にそのような奇蹟が起こせるはずが無いということは自分自身がわかっていることであつたのだ。

だが彼の元には確かに自分に救ってもらつたという者たちが集まっている。

彼はその者達を見捨てることはできなかった。彼らは確かに自分を頼ってきているのだ。

分不相応な救世主の名に苦しみながらも彼は人々と共に戦いを続けた。彼の信じる道であつたから。

彼には誰かについていくことはできなかった。誰もが彼についてくるのだから。

■■■教のあり方を痛烈に批判し、神殿において、暴動を起こすなど、様々な宗教批判を行った。

その中でも彼の起こした言う奇跡は数を重ねていく、曰くそのときの彼は全身に黄金の光を纏い

將に救世主と呼ばれるにふさわしい神々しさを放っていたという。

そして弟子達にも自分の覚えの無い教えが広まっていることに彼は気付いた。

決まってそのときは光を纏った姿であるという。自分の偽者、そう考えたときもあつたが彼の考えは違った。

自分は神に選ばれたと、神が自分の姿を借りて奇跡を起こされ、自分は人々を導く役目を賜ったのだと信じるようになったのだ。

それは、彼らの活動が神殿貴族達への大きな脅威となったため彼は政治犯として処刑されることとなったときも落ち着いていられるほどであった。

処刑の丘を十字架を背負い登る中、彼は考えていた。自分は神に選ばれたもの、このようなところで死ぬはずはない。これは神が与えたもった

試練の一つなのだ。ただ神を信じ、救いの手が訪れるのを待とう。黄金の光に包まれた救世主、その出現を。

両手足を打ち付けられ十字架にかけられ両肩が外れた。その痛みと胸にかかる重みからくる呼吸困難、その苦しみから彼はつぶやいた。

「おお神よ、何ゆえ私をお見捨てになったのですか」

その時、彼の脳裏に声が聞こえた。それは彼の待ちわびた神々しさを持った声で彼の頭に響いた。

「汝の死後を我に委ねよ。されば汝の望みは叶えられる。救いはもたらされるであらう。」

彼がその声にすぐさま承諾の声を上げようとしたとき、ゆっくりと丘を登ってくる人間に気付いた。

否、それは間違いだ。見えるはずは無い。だが確実に向かってくる。そのように認識させられている。しかも誰にも気付かれずに。

その『全身に黄金の光』を纏い、ただ存在を彼に向かって主張しながら近づいてくる姿に彼は将にその声の主であると

確信を持ち、その到着をただ待ち続けていた。

だが、その口からでる第一声は彼に理解はできなかった。

「させぬよ『世界』よ。その■■は許せない。彼の者に与えたのは私だ。よって彼の者より奪う権利は私にある。」

その者は手を空に掲げ、ただ一言呟く、

- - Yetzirah -

形成

Vere filius Dei erat iste
ここに神の子 顕現せり

Longinus lance Testament -
聖約・運命の神槍

その者の腕に輝く黄金の槍が出現した。その存在は神々しくだが、希薄に見えた。

「さて、偽りの救世主、分不相応な聖者よ。私は汝に返済を求めよう。それは汝の求道の対価だ。霸道の犠牲だ。

その身に背負った信仰、畏怖、尊敬、畏敬、羨望、憎悪、その魂ごとと全て私にささげて貰おうか。」

「な・何のことでしょうか？私はあなたに選ばれた……。私は・私……。」

「そう、私は汝を選んだ。再び死する聖者をこの槍で貫くそのために。奴の盤上ルールでこのチカラを成立させるために。

この槍は今不安定だ。世界から逸脱するもの故に、その可能性を秘めたものであるが故、矛盾した信仰を持ち、世界から否定されるものであるが故に

だが私はこのチカラで先を見たい。この愚かな『安定・存続・生存』の世界からいずれ根源へと至る道の確かな道標だ。

そのためには汝にかかる最大限の信仰を贅とする必要があるのだよ。この槍は彼の者を貫く運命になるのだから。」

彼は理解した。この者こそ奇跡を起こし、人々を導き、私を救世主と呼ばせたものであると、神ではない。しかし彼の信じたものであると・・・。

「あ・あなたはいつたい何者であるのだ・・・？」

「フム、そうだな・・・。之も告げよう。我が名は・・・」

「ロンギヌス。」

彼に祝詞が響き渡る。今度は脳裏ではなく耳から、魂へと。

Dieser Mann wohnte in den Gruf
ten, und niemand konnte ihm ke
ine mehr,

その男は墓に住み あらゆる者も あらゆる鎖も

nicht sogar mit einer Kette, b
inden.

あらゆる総てをもつてしても繋ぎ止めることが出来ない

それは祝福にして呪い、そして彼にとっての、後の人々に対する救いと絶望の詩である。

Er ris die Ketten aus ein ander
und brach die Eisen auf seinen
Fusen.

彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 狂い泣き叫ぶ墓の主

Niemand war stark genug, um ih
n zu unterwerfen.

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない

Dann fragte ihn Jesus. Was ist
ihr Name?

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Es ist eine dumme Frage. Ich a
ntworte.

愚問なり 無知蒙昧 知らぬなら答えよう

いずれ塗り替えられる・・・それは人の覇道を持って世界と成すあらゆる世界の一つの世界の

Mein Name ist Legion—
我が名はレギオン

大いなる脆弱な運命の始まりを告げる賛美歌産声である。

B r i a h —

創造

G l a d s h e i m r — G u l l i n k a m b i F u n f t e
W e l t a l l

至高天 黄金冠す第五宇宙

その脇腹へと黄金の槍は深々と刺さり、彼は息絶える。否、彼の者の魂はその槍へと流れ込んでゆく

そして、黄金の槍は確かにこの物語世界のものとして発現した。

「ようこそ……。そして、おかえり。」

汝が我が地獄グラスヘイムの最初にして再びの、そして新たな客だ。」

さあ、往こう。遥かなる旅を、再び恐怖劇グランギニョルを始めるために……。

立ち去る者に人々は終ぞ気付かず、魂の消失と共に消え去る彼の亡骸を前に驚愕とさらなる信仰を感じていた。

立ち去る者の髪と眼は輝く黄金、超人たる奇跡の存在。絶対にして忌むべき光。

されど後世は伝える。彼はその者であると真に救世主であり復活を果たしたと、死後、三日でよみがえり、

多くの弟子たちの前に姿を現したあと、天にむかって昇って行ったという。

それがその者であったのか、彼の者であったのか、知る者はいない。

――その者を除いては――

そして歴史は移り行く、その者、彼の者の物語はこれにて終幕を迎え、新たな主役を迎えなければならない。

世界を渡り、次元を超え、呼ばなければならない。

■ ■ に、勝つために。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

始まりの後奏（プロローグのエピローグ）

人は時に、馬鹿な幻想を抱くと、最近私は常々思う。

それは現実のものであったり、他人から見た痴人の夢といえるものであったり人それぞれだ。

それは私に何の関わりもない、他人がどんなことを願ったところで私は何も感じない。

なぜこんなことを言うかといえば、私には願いがあ。いや、あったはずなのだ。

人は時に、馬鹿な幻想を抱くと、最近私は常々思う。

それは現実のものであったり、他人から見た痴人の夢といえるものであったり人それぞれだ。

それは私に何の関わりもない、他人がどんなことを願ったところで私は何も感じない。

なぜこんなことを言うかといえば、私には願いがあ。いや、あったはずなのだ。

誰にも言えない、だが何者にも譲れない私だけの願いが・・・

だから聖杯よ、私の願いを聞き届けよ。私が私であるための根源・
原風景、それをもう一度

もう一度だけ見せてくれ、そして私を願いを、真の願いを見せてく
れ。

- 成宮家14代目当主 成宮なりみや啓けい

の手記より -

【運命に、明日を望んで

も】

プロローグ エピローグ
始まりの後奏

此処は一つの世界、人の霸道を持って世界と成す世界の理の外、何
者も世界を塗り替えるなどということは考えず、また

実行することなど叶わない世界、そう信じられた世界、少なくとも
これまではそのようなことはなかったのだから。

そのこの日本のある都市、ある民家の一角の話

プチンツ、PCのシャットダウンを確認し青年は眠気に襲われつつ寢床に入った。彼は久しぶりにできた休暇の暇つぶしに

印象に残ったゲームをやり直しつつ、「こんなことあったな〜」、「細かいところまで覚えてないよ〜。」と自分で懐かしみ

ながら時間をつぶしているといつの間にか深夜をまわっていて、気付いた瞬間に睡魔に襲われたのであった。

「まあようやくしばらく暇ができたし、少しはぐうたらさせてもらってもバチはあたらんわな〜。」

そつひとりごちたあと彼はあくびをかき、眠りについた。

彼の名は成宮 啓、26歳どこにでもいるサラリーマンである。。

彼のような人間はどこにでも居るであろうし、彼の行動も普通のことであるだろう。だから特別気にかけることも無い。

彼は単なる一般人なのだ。

この世界では。

ただ彼にはひとつ主役を張ってもらわなければならなかった。人の覇道を持って世界と成す一つの世界の2番手の主役に

今は開幕前、ベルを鳴らす直前の舞台裏。故に本来は語るは後の話となるが常道、まずは舞台を見るのが観客だろう。

俳優は舞台上でこそ真価が問われるのだ。我らが望む舞台は此処にあらず、よって彼には早急に舞台へ上ってもらわなければならない。

そう、世界を渡り、次元を超え、呼ばなければならない。……
……■に、勝つために。

side 啓

・・・気がつけば、自分はどこにいるのかわからなかった。ただ体が動かなくて、目も見えなくて、何もわからなかった。

きつとまだ寝ぼけていて、体が起きていないんだ。早く起きないと、そう思つて意識を集中すると聞こえたんだ。何かの声が…。

「功・・・・・・・・？」

「刻・・・植・・・は・・・・・・・・！！」

「なら・・・・・・・・・・・・・はず」

ここは・・・・？自分は一人暮らしだよな？だとすると、えっとこの声は・・・・ そこまで考えると急に体の自由が自分に戻って

目を開くとそこは実家の一室だった。

「ああ、目が覚めた？啓。どう気分は？」

そこにいるのは両親の姿？なぜここに？いや、自分がいるのが実家だから、ここにいるのはおかしくないのか？いやでも自分は

確かに自分の部屋にいたはず…。

「母さん、ちょっと体がだるいかも。でさ、自分は・・・っ???」

混乱して返事をする声が高い?・・・よく見ると両親も若い、よな?

自分の体も小さい・・・ってことは!!??うん、夢だね。まったくもってリアルすぎるが子供に戻ったのは夢でも久しぶりだ。

まさか時間をさかのぼって精神だけ逆行したということか!!!!!!なんて思ったりはしてないぞ。たぶん。

いいね…実にいい(笑)もう一度人生をやり直せば、という誰しも夢にもみた事実が自分に降りかかるとは思わなかっただけに

この手の夢はいつも楽しいものだ。

「・・・?どうしたのさ!?急にだまりこくって」

「いや、大丈夫大丈夫。ところで今年って何年だったけ?」

「?19××年だが…?どうした?まさか刻印の継承で問題が!?!?」

「なんでもないよ。ちょっと頭が混乱してさ、ん??」

フムフム、今年で9歳、年数はまったくもって合っているね。ここまでリアルだと何か不安になってきたような(汗)。

それではて、何か聞きなれない単語が父親の口から出たような、刻印?継承?家にそんな大層な資産はないよ?普通のサラリーマンだし

「刻印ってなにかあったっけ?」

「なにを言ってる。昨日で魔術刻印の移植はすべて終わっただろう。早いとは思ったがお前のたつての希望だ。それで今まで意識がなかったんだが…」

いまのところ大丈夫なようだが、…頭に障害が出たのか…ブツブツ。

「

…どうやら自分は若返りだけでなくゲームで魔術な夢も同時に見ているらしい。もう四捨五入すれば30だというのに…ちょっとはいいかも。

side out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5198o/>

運命に、明日を望んでも

2010年10月30日13時44分発行